藤谷慧燈と余乗学

――『冠導阿毘達磨倶舎論』と『台宗二百題』の編纂――

京都光華女子大学
真宗文化研究所委嘱研究員
英　亮

序

本稿では、玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』（以下『倶舎論』）全編に注釈を施し、『冠導阿毘達磨倶舎論』（以下『冠導倶舎論』）の形態として一般に普及することを企図したうちの一人、大谷派・藤谷慧燈（一八五九―一八九六）らの活動に着目し、明治期における余乗学の一側面を明らかにするものである。[1] ちなみに、筆者は近世から近代にかけての真宗大谷派における余乗学の動向に関心を有しているため、本稿をもってその端緒とすることにしたい。

まず、余乗学について言及しておく。大谷派における余乗学とは、近世から盛んとなったいわゆる「伝統宗学」[2]のうち、華厳・天台・倶舎・唯識・因明・戒律・真言など自宗以外の学びを指す。近世・近代における大谷派（東派）の僧侶達は、これら余乗を宗乗（真宗の教義についての学問）と同様に重んじ、他山を歴訪し研鑽に励みながら、高倉学寮ないし地方の僧侶育成機関において盛んに講じるなど、[3] 積極的に受容した形跡が見られる。このような余乗学の成果は真宗以外の研究者から注目を集めているように、[4] 現在でも一定の学的水準を有していると言ってよかろう。

なお、近世から近代初頭にかけて余乗学が積極的に研鑽された要因として、比叡山修学時代の親鸞（一一七三―一二六三）の行業を追体験する意図が存在したことを以前に指摘した。[5] すなわち、余乗学は単なる仏教の基礎教養である以上に「聖道の難行たることを知ると共に、亦弥陀本願の由りて起りし所以を知る」[6]という目的が僧侶たちの中で共有されていたようであり、その意識は少なくとも近代まで確認できる。[7] また、近世末期になると、余乗学は宗内で盛んとなった「護法思想」（キリスト教や哲学、儒教、天文学などの仏教以外の教えから仏教を護ることを意図する活動）[8] に際して、超宗派的な仏教知識を提供する役割をも担った。

以上、余乗学の意義を踏まえたうえで、本稿の位置づけを述べたい。従来、近代における大谷派の研究動向としては、前述の護法運動、南条文雄（一八四九―一九二七）・笠原研寿（一八五二―一八八三）らの欧州留学、海外への開教活動、清沢満之（一八六三―一九〇一）らによる精神主義運動など、明治期の〝近代化〟に腐心した宗門の動きに関心が集まる場合が多い。[9] しかしながら、本稿でとりあげる藤谷慧燈と豊満春洞（一八五七―一九三一）ら大谷派僧侶と、法蔵館店主・西村七平（一八五四―一九一九）が協力し、比叡山や泉涌寺に占有的であった余乗の知識を版本という形で〝近代化〟し、普及した事実はまったく知られていない。特に本稿では藤谷の動向に着目しつつ、明治期における余乗学の一側面を指摘するものである。

藤谷慧燈について

藤谷の経歴に関しては、『真宗人名辞典』『日本仏教人名辞典』などの一般的な僧侶人名辞典に記載がなく、愛知県一宮市・了泉寺から滋賀県長浜市・明楽寺へと養子に入り、明治二九年（一八九六）に三七歳で早世したこと以外は定かでない。[10] ただし、筆者が調査したところ藤谷の学問研鑽については以下の点が判明した。

㈠ 泉涌寺一四三代長老・佐伯旭雅（一八二八―一八九一）の元で性相学（倶舎・唯識・因明）の知識を学んでおり、そのノートは現在も明楽寺に保管されている（「補足資料」参照）[11]。なお、藤谷による性相学研鑽は、後の大谷派・富貴原章信（一九〇七―一九七五）へと影響を与えたという指摘もある[12]。

㈡ 二三八世天台座主・中山玄航（？―？）のもとで天台学を学ぶ。その際に藤谷が入手したと見られる典籍の一部については、「補足資料」を参照[13]。

㈢ 法蔵館の主催する「仏教学会」において『華厳五教章』『百法問答杯』（ママ）を講じる[14]。

㈣ 宗学については学寮講師・細川千厳（一八三四―一八九七）から学んでいたとある[15]。

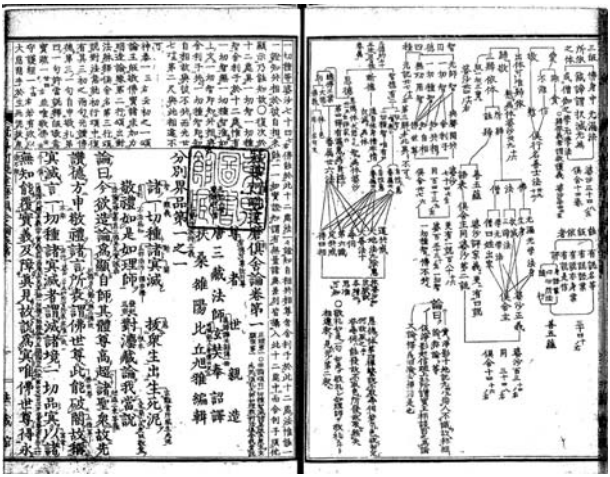
㈤ 京都の仏書専門店である護法館・西村九郎右衛門（？―？）あるいは法蔵館・西村七平のもとで、真宗・仏教関係の出版物編纂に関与していた。

藤谷によるこれらの学問研鑽の蓄積は、明楽寺に残る膨大な蔵書からもうかがえる[16]。このうち、特に重要と見られるのは㈤であろう。「大谷大学古典籍データベース」[17]ならびに「国立国会デジタルコレクション」[18]を中心として、藤谷が編纂に携わった出版物をまとめると次のようになる。

書名・巻数	出版社	発行年	著者・講者	編纂・校閲者
七十五法名目講義（1-5）	西村七兵衛	明治18	四辻鳳千	瀬辺恵燈・杉原春洞
倶舎宗大意（全）	西村七兵衛	明治19	佐伯旭雅	瀬辺恵燈
冠導阿毘達磨倶舎論（１―30）	法蔵館　西村七兵衛	明治20	佐伯旭雅	瀬辺恵燈・杉原春洞
冠註八宗綱要（1－2）	法蔵館　西村七兵衛	明治20		瀬辺恵燈・杉原春洞
冠導八宗綱要（1―2）	西村二書館	明治21	佐伯旭雅（校閲）	瀬辺恵燈・杉原春洞
冠導三國佛法傳通縁起（1―3）	永田文昌堂・西村護法館・澤田文栄堂	明治21	佐伯旭雅（校閲）	瀬辺恵燈・杉原春洞
倶舎論記（1―30）	法蔵館　西村七兵衛	明治21	佐伯旭雅（校訂）	瀬辺恵燈・杉原春洞
倶舎論疏（1―30）	法蔵館　西村七兵衛	明治21	佐伯旭雅（校訂）	瀬辺恵燈・杉原春洞
冠導因明三十三過本作法纂解　（上・中・下）	西村二書館	明治21	佐伯旭雅（校閲）	瀬辺恵燈・杉原春洞
冠導/増補）成唯識論（1～10）	西村七兵衛	明治23	佐伯旭雅	瀬辺恵燈・杉原春洞
文類正信偈講義（上・下）	護法館	明治23	香月院深励	藤谷恵燈
唯識論名所雑記（上・中・下）	法蔵館　西村七兵衛	明治23	佐伯旭雅	藤谷慧燈・豊満春洞
念仏往生願講義（本・末）	護法館	明治24	香月院深励	藤谷恵燈
無量寿経五悪段講話（上・下）	護法館	明治24	香樹院徳龍	藤谷恵燈
坊守御教示聞書	西村九郎右衛門	明治24	香樹院徳龍	藤谷恵燈
見真大師　比叡山御修行法話	西村九郎右衛門	明治24	顕誓院祐正	藤谷恵燈
自信教人信講話	西村九郎右衛門	明治24	香樹院徳龍	藤谷恵燈
言南無者講義	護法館	明治25	香月院深励	藤谷恵燈
正信偈法話（1―6）	法蔵館	明治25	香雲院澄玄	藤谷恵燈
浄土論註講義（1―8）	西村九郎衛門	明治25	開悟院霊畦	占部観順・藤谷恵燈
正信念仏偈解（上・下）	西村九郎右衛門	明治26	開悟院霊畦	藤谷恵燈
阿弥陀経十六羅漢法話（全）	西村九郎右衛門	明治26	明楽寺祐正	藤谷恵燈
四教儀集註講述（1―12）	西村九郎右衛門	明治28	赤松法宣	藤谷恵燈
報恩講式文講義　（上下）	西村九郎右衛門	明治28	雲華大含	藤谷恵燈
冠導台宗二百題（1―15）	法蔵館	明治28	中山玄航（校閲）	藤谷恵燈
掟御文講話（全）	西村九郎右衛門	不明	香樹院徳龍	藤谷恵燈
横川法語（上・下）	護法館	不明	皆遵院宜成	藤谷恵燈

一目すれば、藤谷がおよそ十年の間に膨大な数の出版に携わっていたことが分かるだろう。簡単に分類すると、初期は余乗が多く、後々になると宗乗、特に高倉学寮で講師を務めた人物たちの講義録を編纂していたようである。なお、藤谷が編纂した書物のうち、特に評価されているのは『冠導倶舎論』ならびに『冠導台宗二百題』である。[19] ここからは、『冠導倶舎論』に関して論及することにしたい。

『冠導阿毘達磨倶舎論』の刊行事業



国立国会図書館デジタルコレクションより転載

法蔵館から出版された『冠導倶舎論』は、玄奘訳『倶舎論』について、性相学の権威と称された泉涌寺長老・佐伯旭雅による全編注釈を施した史上初の〝冠導〟[20]本である。この書は古来高い評価を受けており、「旭雅僧正の冠導本が出て此処に初めて闇夜の灯であるかの感を深うせしめた」（舟橋一哉［一九七七］）、「…冠導本の権威は、百年を経過した今も決して落ちてはいない」（舟橋水哉［一九一九］）、「…「冠導本」すなわち『冠導阿毘達磨倶舎論』（幕末から明治にかけての学僧佐伯旭雅の編著）は、江戸時代までの〝倶舎学〟の成果を集大成してそれを頭註および傍註として倶舎論本文に加えた述作で、今もそれから学び得る所は多大である」（櫻部建［一九九五］（四六））などと言われる。ちなみに、その際に製作された『冠導倶舎論』の版木は、現在も法蔵館裏手にある版木蔵に保管されている（以下の写真は、法蔵館編集長・戸城三千代様にご許可をいただき、撮影したものである）。

さて、この『冠導倶舎論』は当時一般的ではなかった余乗関連の大部におよぶ〝冠導〟本ということもあり、同じく法蔵館から出版された『冠導成唯識論』と並んで「当時大いに耳目をあつめ、祖父（七平）の労作のうちの一つに数えられるもの」とされる（四代目・西村七兵衛［一九七七］（一四七））。このとき「耳目を集めた」背景としては、大きく三つの要因が挙げられよう。

㈠ 余乗に関する出版活動が「…廃仏毀釈、キリスト教の進出や天理教の出現で起死回生の近代化を余儀なくされていた当時の教団・教学に学問的な基礎資料を提供するという、輝やかしい時代的意義を担うことにもなった」（四代目・西村七兵衛［一九七七］（一四七））こと。[21]

㈡ 「江戸時代に繁昌した書肆の大半が、明治以降消滅を余儀なくされ（中略）時代の変革は人びとの嗜好そのものを変えたからで、絵草紙や旧態依然とした読本のたぐいはもはや人びとの好むものではなかった」こと（五代目・西村七兵衛［一九九六］（八二））。

㈢ それまで『倶舎論』研究の主流であった偈頌部分の解説ではなく、[22]『倶舎論』全体の本論について解説を施した点が画期的であったと見られること。

このように、法蔵館と仏教界における明治期の切迫した状況、ならびに『倶舎論』の全編注釈という画期的な面が、『冠導倶舎論』の「耳目をあつめ」る方向に作用したと推察される。以上述べたように、明治期の仏教界において大いに注目されていた『冠導倶舎論』であるが、主導者である佐伯に助力し、「和上の著述には必ずといってよいほど貢献した二人の門弟」（横超慧日［一九七五］（七三））が藤谷慧燈（旧姓：瀬辺）と、豊満春洞（旧姓：杉原）[23]であった。ここからは残された史料を通じて、藤谷・豊満が『冠導倶舎論』編纂にいたるまでの経緯を見ていきた

い。

藤谷・豊満は、明治一七年（一八八四）ころから佐伯旭雅と師弟関係を結んだと見られるが、[24] 真言宗僧侶の佐伯が他宗の藤谷らを「常随」（弟子の中でも特に目をかけ、常に同伴させること）とした背景には、佐伯自身の「弥陀信仰」が関係しているのかもしれない。[25] 一方、法蔵館・西村との交流も同時期と見てよかろう。[26] 次に、藤谷・豊満が佐伯氏の門下となった経緯、そして『冠導本』制作に関して確認したい。『冠導本』にある二つ目の序文には以下のようにある。[27]

【原文】

冠導阿毘達磨倶舎論序

佐伯旭雅上人、編輯冠導阿毘達磨倶舎論、杉原春洞・瀬辺恵燈勘文之。既上梓乞序。山野**山野、頑在於不立文字之家、又何知之。而春洞・恵燈二子、来責之懇至塞之無辞。**因思之上人、博識卓見而成此編輯、利益後生不尠。二子亦輔之、而成功可謂勤矣。而上人曰、不過雛僧階梯。以予見之乃不然。遂賦野偈一首曰、初発心正覚階梯、即宝樓学知。無学地始、好作帰休、乃是為序。

明治十九年五月

萬年退耕菴主独園識

雒下　玉堂汎香謹書

【書き下し】

冠導阿毘達磨倶舎論序

佐伯旭雅上人、冠導阿毘達磨倶舎論を編輯し、杉原春洞・瀬辺恵燈これを勘文す。既に上梓して序を乞う。山野山野、頑に不立文字の家にありて、また何ぞこれを知るや。しかして春洞・恵燈の二子、来りてこれを責め、懇に至りてこれを塞しを辞すなし。よりて、これを思うに上人、博識卓見にして、この編輯を成じ、後生を利益すること尠なからず。二子またこれを輔け、成功して勤むと謂うべし。しかして上人いわく、雛僧の階梯に過ぎず、と。おもうに予これ見るにいまし然らず。遂に賦野の偈一首をいいて、初発心正覚の階梯、すなわち宝樓の学知とす。無学地の始め、好んで帰休を作し、すなわちこれを序となさん。

明治十九年五月

萬年退耕菴主独園識

雒下　玉堂汎香謹書

傍線部には、藤谷（瀬辺）・豊満（杉原）が「山野」（真言宗寺院）や「不立文字の家」（禅宗）に秘蔵されていた『倶舎論』と人の注釈書の版木を用いて校訂し、一般に公開するように佐伯旭雅に促したとある。さらに、佐伯旭雅が作成した別の序文によると、もともと冠導本の形態を取る予定ではなかったが、法蔵館・西村七平の懇願により、「冠導本」の体裁として出版事業が始まったことが述べられている。[28] 以上のように、『冠導倶舎論』刊行事業は西村・藤谷・豊満の発起と、それに佐伯が応答するかたちで開始された。その後、西村七平は毎朝泉涌寺へと向かい、「冠

導倶舎論」の原稿を佐伯旭雅から受け取ると、その原稿をもとに藤谷・豊満が校訂を施し、木版に起こす作業を数年に渡って継続していったようである。このとき、『冠導倶舎論』全三十巻の全校訂は藤谷・豊満の両人のみで行われたが、この書に対する現代までの評価を鑑みるとき、佐伯・西村と並んで藤谷・豊満の功績は再評価されるべきだろう。

『台宗二百題』の刊行事業

藤谷のもう一つの重要な業績として『冠導台宗二百題』の編纂事業が挙げられる。この書は「斯道興隆のため甚大な功績を残された」と天台宗内で評価されるように[29]、藤谷の余乗学に関する大きな業績の一つに数えられよう。『冠導台宗二百題』の序文には、二三八世天台座主・中山玄航によって製作までのあらましが説かれている。

【原文】

註台宗二百題序

西域曰鄔波弟燦、舊翻優婆提舎云、論義也。経宣断諸疑惑、宗祖判之、真正学仏道之津要也。月氏・震旦・本邦諸徳、皆莫不従事於斯学。吾山則至御廟大師見以興盛也。後門下　分為二。恵心・檀那之両流是也。各摘教観諸部要文所討論、論皷、以至数百條、皆流布于世、伝習已久、而享保年間校是之、而為二百條、撰異部類、標揭宗要・義科・問要、勒而為十五巻焉。此書東台蔵梓也。惜哉聞有欠損。頃者、書林某謀恵燈師、再刻之、将以嘉恵。真正学仏道者、来告余ニ曰、善哉、舉幸近代有法曼密室、義空僧正博識多才。曽偏覧諸部之間、本論就所引証之経論疏釈、而示本文出処紙号、記三巻。及諸部中、蹟出教観関節要文、集合而為五巻、倶題称補助記。便以本宗初学、可謂照闇夜之

大灯也。今則再刻縮刷冠註、援拠後学資論義之習起。検尋之徒労。且欲使山村僻地好学、不能得書、大為金城。蓋看者察焉。今応需操筆、書異梗概。云爾

明治二八年乙未二月

叡岳執行探題大僧正玄航識

【書き下し】

註台宗二百題序

西域に鄔波弟燦という、舊くは優婆提舎と翻ず、論義と云うなり。経に宣ぶる諸の疑惑を断じ、宗祖これを判じて、真の正学仏道の津要なり、と。月氏・震旦・本邦の諸徳、みなこの学に従事せざることなし。わが山すなわち御廟大師にいたりて見てもって興盛するなり。後の門下　分かちて二となす。恵心・檀那の両流これなり。おのおの教観諸部の要文を摘りて、討論するところ、論皷、数百條に至るをもって、みな世に流布し、伝習すでに久しくして、享保年間にこれを校ずるを、二百條となし、異部類を撰じて、宗要・義科・問要を標掲し、勒して十五巻となす。この書は東台藏の梓（はんぎ）なり。惜しいかな欠損ありと聞く。頃者、書林某は恵燈師と謀し、これを再刻すること、まさにもって嘉恵とす。真の正学仏道者は、来りて余に告げていわく、よいかな、幸を挙ぐるに近代法曼の密室、義空僧正なるものありて博識多才なり。かつて諸部を徧覧するの間、本論の引証するところの経論疏釈について、本文の出処の紙号を示し、三巻を記す。および諸部の中、教観関節の要文を賾出し、集合して五巻となし、ともに題して補助記と称す。すなわち本宗の初学をもって、闇夜を照らすこの大灯なりというべきなり。いますなわち再刻縮刷冠註し、後学を援拠して、論議の習起、検尋の徒労を資くなり。且く山村僻地好学の、書を得ることあたわざるものをして、大いに金城となさしめんと欲す。蓋し看る者は察せん、と。今まさに需めて筆を操り、異の梗概を書す。云爾

明治二八年乙未二月
叡岳執行探題大僧正玄航識

そこには、天台論義の中でも特に重要とされる二百條を取り上げた『台宗二百題』（十五巻）について、「書林某（西村七平か）」と藤谷が「再刷」することを願い出たとある。そして「再刷」するにあたり、かつて天台宗僧侶・義空（？―？）が施した『台宗二百題』の「補助記」の内容を本文とともに附し、全五巻に整えたとある。このとき、『台宗二百題』と「補助記」の内容を校訂するという煩雑な作業を一人で完遂したのが藤谷であった。藤谷は、中山玄航のもとで天台教学を数年かけて学び、天台宗内部でもその実力が評価されていたために『冠導台宗二百題』の編纂を全うすることができたのだろう。

ちなみに、法蔵館から出版された『冠導台宗二百題』の副題には、「法蔵館冠導全書第一編」とある。このことは、天台教学をはじめとする余乗学の重要なテキストについて、法蔵館から縮刷・冠導本としてシリーズ化することが企図されていた傍証となる。しかしながら、『冠導台宗二百題』出版直後に藤谷が急逝したこともあってか、このシリーズは『冠導台宗二百題』以後刊行されなかった。仮に藤谷が存命であったならば、天台教学に引き続き華厳・倶舎・唯識・因明などの縮刷・冠導本が出版されていた可能性も否定できまい。

小　結

明治維新を境に、創業当時の法蔵館では江戸期からの体制が見直され、新たな読者層の獲得に腐心していた。一方の仏教界においては、西洋から流入してきたキリスト教に対する護法が喫緊の課題となっていたようである。そのよ

うな状況下でなされた『冠導倶舎論』および『冠導台宗二百題』刊行事業は、法蔵館側としては専門的な余乗学の知識を提供することによって新たな読者を獲得することが企図されており、仏教界側はキリスト教などの外教に対抗するための「通仏教」的知識を会得する役割が見込まれていた。

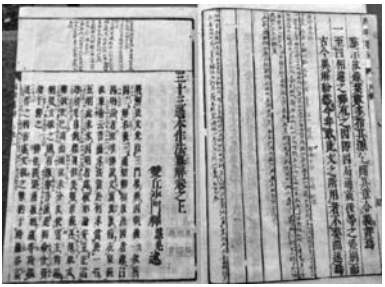
『冠導倶舎論』の出版事業はその嚆矢となったが、その主導者は法蔵館・西村七平であり、西村七平の希望に応え『倶舎論』の教学を提供したのが泉涌寺官長・佐伯旭雅であった。それに加えて、本稿で取り上げた藤谷そして豊満による『冠導倶舎論』全三十巻の校訂も特筆すべきである。このように、西村・佐伯そして藤谷・豊満の尽力によって『冠導倶舎論』は刊行されたが、このことは明治期における余乗学の重視とその影響力を物語ることがらであろう。

なお、藤谷のもう一つの重要な業績として『冠導台宗二百題』の編纂事業が挙げられる。先にも述べたがこの書は「斯道興隆のため甚大な功績を残された」と天台宗内で評価されるように、藤谷の余乗学に関する大きな業績の一つに数えられよう。ちなみに、この『冠導台宗二百題』が「法蔵館冠導全書第一編」であることからして、シリーズ化が見込まれていたようであるが、それは藤谷の急逝によってかなわなくなったと見られる。

今後は明楽寺に残る藤谷の蔵書を精査することにより、藤谷の余乗研鑽の動向についてさらなる検討を加えることにしたい。

佐伯旭雅の講義録 3

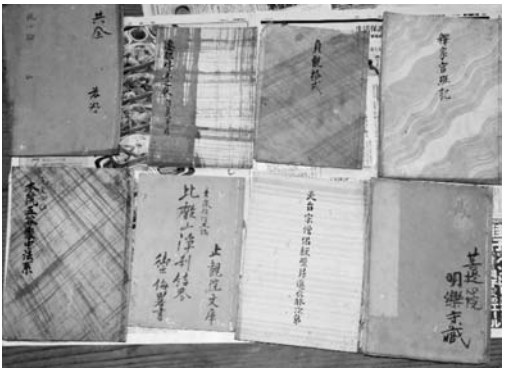
佐伯旭雅の講義録 1



『冠導因明三十三過本作法纂解』の下書きか？

佐伯旭雅の講義録 2

香月院深励と並び称された円乗院宣明による『華厳五教章』講録の写本



藤谷が比叡山修学中に手に入れたと見られる書物

凡例

一、旧字体は原則的に通行体に改めた。
一、送り仮名は原則的に現代仮名遣いに改めた。
一、参考文献の頁数は（　）内に記した。
一、文章の途中からの引用は、語頭に「…」で示した。
一、引用文中における傍線や（　）等は、すべて筆者が記した。
一、引用文中の圏点、傍点は省略した。

参考文献

一次文献

『冠導阿毘達磨倶舎論』（一九九三、第二刷、法蔵館）
『冠導台宗二百題』（一八九五、法蔵館）
三代目・西村七兵衛日記（法蔵館所蔵）

二次文献

上杉文秀［一九三一］「豊満講師を追懐す」（『大谷学報』一二―一）
大谷大学百年史編集委員会［二〇〇一㈠］『大谷大学百年史』〈通史編〉（石田大成社）

同　［二〇〇一㈡］『大谷大学百年史』〈資料編〉（石田大成社）
横超慧日［一九七五］「富貴原章信先生を偲ぶ」（『大谷学報』五五―二）
柏原祐泉［一九六九］『日本近世近代仏教史の研究』（平楽寺書店）
同　［一九八六］『近代大谷派の教団―明治以降宗政史―』（真宗大谷派宗務所　出版部）
同　［一九九六］『真宗史仏教史の研究Ⅱ（近世篇）』（平楽寺書店）
同　［二〇〇〇］『真宗史仏教史の研究Ⅲ（近代篇）』（平楽寺書店）
古宇田亮宣［一九六六］『和訳　天台宗論義二百題』（隆文館）
佐伯法雲［一八九二］『福智無辺：旭雅和上内外伝』（五明社創立事務所）
櫻部建［一九九五］「新たに説一切有部を志す人のために」（『仏教学セミナー』六一）
同　［一九九九］「大谷大学の倶舎学の伝統について」（『仏教学セミナー』七〇）
鈴木朋子［二〇一六］「吉谷覚寿における仏教復興の道」（『近代仏教』二一）
住田智見［一九八七］『白毫の光』（復刻版、住田智見先生遺徳顕彰実行委員会）
曽我量深［一九一二］「我等が久遠の宗教」（『曽我量深選集』二所収、彌生書房）
中西直樹［二〇一八］『新仏教とは何であったか　近代仏教改革のゆくえ』（法蔵館）
四代目・西村七兵衛［一九七七］「ひとすじの道―聞書・四代目西村七兵衛の歩み―」（『仏教書出版三八〇年』所収、法蔵館）
五代目・西村七兵衛［一九九六］『仏教書出版三八〇』（法蔵館）
西村実則［二〇一五］「法隆寺・佐伯定胤と渡辺海旭―仏典の伝統的研究と原典研究―」（『大正大学研究紀要』一〇〇）

富貴原章信［一九六九］〔〈人と業績〉佐伯定胤老師―法隆寺の故和上を偲んで―〕（『仏教学セミナー』一〇）
舟橋一哉［一九七七］「はしがき」（『冠導阿毘達磨倶舎論Ⅰ』所収、法蔵館）
舟橋水哉［一九一九］「冠導倶舎論と七平氏」（『法蔵』三四〇、法蔵院追悼号）
同　［一九三一］「豊満先生を偲ぶ」（『大谷学報』一二―二）
同　［一九四〇］『倶舎の教義及び其歴史』（法蔵館）
松金直美［二〇一八］「「伝統仏教」―近世から近代への展開―」（『日本宗教史のキーワード　近代主義を超えて』所収、慶応義塾大学出版会）
村上専精［一九〇〇］「越後国無為信寺両講師」（『無尽灯』五―一）

注

（1）本稿に際し、法蔵館代表・西村明高様、同編集長・戸城三千代様、寶樹山　明楽寺様、負別山　宝満寺様、同朋大学・川口淳先生、大谷大学・戸次顕彰先生、元大谷大学大学院・柏樹貴弘様には多大なるご協力を賜った。ここに感謝申し上げる。

（2）「伝統宗学」とそれに対置される「近代教学」という概念については、松金直美［二〇一八］（三五八―三五九）を参照。なお、「伝統宗学」の中心である宗乗に関しては、『真宗大系』『続真宗大系』『真宗全書』という形で多くの講録がまとまって刊行されている。

（3）学寮における余乗学の講義については、大谷大学百年史編集委員会［二〇〇一㈡］（七〇五―七一八）「3　真宗大谷派安居歴年開講一覧」を参照。地方における余乗学の研鑽については、仏教史学会五月例会にて「大谷派余乗学の軌跡―無為信文庫と学僧たち―」という形で発表した。

（4）詳細については、「大谷派余乗学の軌跡―越後・無為信寺と学僧たち―」（仏教史学会例会・二〇二二年五月）において指摘した。

（5）詳細については、「大谷派余乗学の軌跡―越後・無為信寺と学僧たち―」（仏教史学会例会・二〇二二年五月）において指

摘した。

(6) 性相学（倶舎・唯識・因明等の学問）に精通していた大谷派講師・香樹院徳龍（一七七二―一八五八）は、このように述べたとある（村上専精［一九〇〇］（三八）。

(7) いわゆる近代教学者として名高い曽我量深（一八七五―一九七一）は、香樹院徳龍の自力観を受けて「徳龍師の言の如く我等が他宗の学問や哲学を修むるは徒に此等の智識を運用して宗学を荘厳せんが為でなく、此に依りて深く自己の現実を観顕し、自力無効を反照せんが為である。宗学の意義此に在る」（曽我量深［一九一一］・三六五―三六六）と述べている。

(8) いわゆる「護法思想」について指摘するものは数多くあるが、柏原祐泉［一九九六］「六　近世の護法思想と庶民教化」、同［二〇〇〇］「一　幕末維新期における近代仏教への胎動」が網羅的である。なお、大谷派や本願寺派では、諸宗と比しておいていち早く外学（キリスト教や哲学など）の研究を開始するが、その背景には〝宗乗以外も積極的に学ぶ〟という余乗学で培われた伝統が関係しているという見方もできよう。この点については、オレゴン大学・ジェフシュローダー先生にご指摘いただいた。

(9) それらは枚挙にいとまがないが、たとえば柏原祐泉［一九八六］・［一九六九］・［二〇〇〇］、大谷大学百年史編集委員会［二〇〇一㈠］などがある。

(10) 横超慧日［一九七五］（七三）、古宇田亮宣［一九六六］（七三〇―七三一）。なお、三代目・西村七兵衛氏の日記には明治二九年（一八九六）一月二六日の夜から藤谷は体調を崩し、一旦回復するかに見えたものの、同年二月一三日午前六時三〇分に逝去したとある。なお、日記の翻刻に当たり、法蔵館代表取締役・西村明高様、同編集長・戸城三千代様に多大なるご協力をいただいた。ここに感謝申し上げる。

(11) 『冠導倶舎論』序文を参照。

(12) 横超慧日［一九七五］（七三）。ちなみに、藤谷の出身地である愛知県・一宮市近辺からは、稲葉圓成（一八八一―一九五〇・天台）、横超慧日（一九〇六―一九九六・中国仏教）、小島恵見（一八八〇―一九三七・性相学）など、いわゆる仏教・余乗学に精通した学僧が輩出された。今後はその地域性という面に着目しつつ、研究を進める必要があるだろう。

(13) 『冠導台宗二百題』序文を参照。また藤谷が修学した天台学は、近代大谷派天台学の碩学・上杉文秀（一八六七―一九三六）の先駆として注目される。

(14) 五代目・西村七兵衛［一九九六］（六〇―六一）。なお、藤谷が『華厳五教章』を講じた際に用いた講本は、現在も明楽寺内の蔵に保管されている。

(15) 三代目・西村七兵衛日記・明治二九年二月一四日の項には、「師（藤谷）亦導ニアルノハ細川千厳師甚也」とある。

(16) 明楽寺の蔵書は、版本・写本合わせて膨大な数に登るとともに、重要な史料が多々確認できる。筆者が確認したところでは、泉涌寺・佐伯旭雅の講義録、円乗院宣明による『華厳五教章』の講義録（写本）をはじめ、「比叡山延暦寺」の押印がある版本などが確認できた（「補足資料」を参照）。なお、寶樹山　明楽寺様には特別なご許可をたまわり、蔵書を拝見させていただいた。ここに感謝申し上げる。

(17) 大谷大学図書館古典籍（otani.ac.jp）

(18) 国立国会図書館デジタルコレクション（ndl.go.jp）

(19) 三代目・西村七兵衛氏の日記・明治二九年（一八九六）二月一四日の項目には、「師生前筆を執り嘗て故佐伯大和尚の門下ニアリ今ノ杉原春洞学師ト居ヲ共ニシ冠導倶舎論編纂ノ大業を成シ名大ニ揚リ冠導台宗二百題ハ師ノ絶著トシテ思ル可リ好評嘖々務カン台学ノ形見トナリシコソ憫レナリ」とある。

(20) 「冠導」もしくは「冠註」とは、原文の上段に各項目の注釈を施した書物のことを指す。この形態がいつころから普及したかは定かではないが、少なくとも江戸期における版本形態が流通してからのことであろう。詳細については後考を期したい。

(21) 特にキリスト教の京都における活動に関しては、明治一四年（一八八一）から活発になっていたことが指摘されている（中西直樹［二〇一八］（二二―二三））。それらキリスト教勢力、ならびに神智学協会、ユニテリアンなどが国内へと流入することを背景として、「明治二〇年代は、「通仏教」という考え方が意識されはじめ、通仏教的結束の必要性が急速に仏教者の間に浸透していった時代である」（中西直樹［二〇一八］（五四））と評される。このような時代背景があったために「仏教の礎」（『冠導倶舎論』序文・佐伯旭雅撰）を提供する『冠導倶舎論』は、「通仏教的結束」を仏教界に提供する上で重宝されたのであろう。

(22) 舟橋水哉［一九四〇］（四二）。

(23) 豊満については、上杉文秀［一九三二］、舟橋水哉［一九三一］に詳しい。なお、豊満門下・舟橋水哉（一八七四―一九四五）はその白眉として名高い。

(24) 京都の随心院で行われた佐伯旭雅の「追悼座談会」に際して、豊満が送った「旭雅師に関する感想」には、「拙僧明治一七年より二十年まで薫育を受けた大の恩恵を蒙りたる事、終生忘るゝを得ざる喜びなり」とある（舟橋水哉［一九三二］（三九〇））。ちなみに、佐伯門下であり後の法隆寺管長・佐伯定胤（一八六七―一九五二）も、同年から佐伯旭雅門下になったことが指摘されており、藤谷・豊満との交流が注意される。

(25) 住田智見［一九八七］（二一九）には、佐伯の「弥陀」信仰を伺わせるエピソードが記載されている。また、佐伯は「弱年の時高倉の学寮の講義を二回聴講」するなど、早い段階から大谷派と交流していたようである。さらには、佐伯が『大無量寿経』「三誓偈」を典拠として、独立した西村七平の出版社を「法蔵館」と命名したことを勘案しても、佐伯と真宗の親近性が窺えよう（五代目・西村七兵衛［一九九六］（五五））。

(26) 先の表を参照すると、藤谷・豊満が法蔵館の編纂活動を開始するのは明治一八年（一八八五）ころであるため、それ以前から西村と交流していたことはほぼ間違いあるまい。

(27) 序文の翻刻にあたり、同朋大学仏教文化研究所・川口淳先生、大谷大学・戸次顕彰先生には大変重要なご指摘を多々頂戴した。ここに重ねてお礼申し上げる。

(28) 『冠導倶舎論』巻頭の佐伯旭雅の序文によると、最初の段階では先匠の「冠書傍注本論」に「また冠導を加え図を挿入し、もって講辨を補わんとす」る予定だったが、「近輓の書肆某（西村七平）、刻むを請う。講本は後進を便にす」という再三の願いにより、「冠導本」の形態として出版することを許したとある。

(29) 古宇田亮宣［一九六六］（一一）。